
魔法少女リリカルなのはStrikerS 《白髪獣眼の戦士》

P A N D O R A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers《白髪獣眼の戦士》

【Nコード】

N7415P

【作者名】

PANDORA

【あらすじ】

偶然シグナムが発見した、とある研究施設。
フェイトとシグナムは、その研究施設の隠し部屋で、白髪の少年を見つける…。

この二次創作は、原作の知識があまり無い作者により作られます。原作との違いが多々出てくる事を前提に、お読みください。

ブローグ

- - - - -

様々な機器類や物が散乱した部屋を彼女は見回す…。

彼女の名は《フェイト・T・ハラウン》、執務官である。

フェイトは、この研究施設が生体実験に使っていた形跡があると報告を受け、仕事を直ぐ様かたずけて来たのである。

フェイトは部屋を見回した後、自分に近い位置にある研究机の上に置かれた、研究ファイルらしき書類を手にとった。

一通りに目を通し…。

「……………！」

自然と書類を掴む手に力が入り、書類はグツシャになってしまった。無理もないだろう、彼女は自分に誓ったのだ。救われない命を、救いたいと。

「…テストロッサ、此所にいたか…。」

後ろから聞こえた声に、フェイトは振り向く。

そこには、この研究施設のことを知らせてくれた張本人である、シグナムがいた。

「…シグナム、どうしたの？」

「ああ、何か目ぼしい物はあったか、と思つてな。まあ、大方の物は先の調査隊の連中が持つていつてしまつて、大した物は残つて無いかもしれんが…。」

シグナムはこの研究施設を見付けた第一人者ではあるが、管理局に報告する以上は、部外者であるフェイトよりも先に、調査隊が入る方が早いのは必然だ。

「そんな事はない、十分だよ。それに元々大した物は残つて無かつただろうしね…。」

今までも何度か、スカリエッティの研究施設を見てきたフェイトは知つている。

こんな研究をする人達が、重要な物を残して行く様な奴等では無いことを…。

「…それにしても酷いな…。」

シグナムは自分が歩いて来た通路に、視線を向けながら呟く。

「うん、酷すぎるよ、あんなの…。」

彼女達が通つて来た通路には、研究に使われたのであろう、生物で”あつた”はずの死骸が、無数の生体ポットの中に浮いていた。

大半は調査隊が調査を進めると同時に回収されたが、回収するにしても数が数だけに放置去れた物がまだ数多くある。

「こんな事、早く止めさせなきゃ…！」

「まあそう焦るなテストロッサ、落ち着け。」

怒りを露にするフェイトに、シグナムは宥める様に、肩に手を添える。

「あつ、ごめんシグナム…。」

「気にするな、私もお前と同じ気持ちだ…。」

そう言うシグナムの、フェイトの肩に乗せている手とは反対の手は、硬く握られていて少しばかり血が垂れている。それだけ彼女も怒りを耐えるのに必死だった。

暫くの間、数秒あるいは数分の沈黙の後、シグナムが口を開いた。

「……………出よう。」

シグナムの提案に、うん…とフェイトは頷き、二人は部屋から出た。

- - - - -

部屋から出た二人は、元来た通路を無言で歩いていた。

そうさせるのは、通路の脇に設置された生体ポット達。

無惨にも生と言う一つの自由を、ただ一つの目的の為に根刮ぎ弄ばれた残骸達…。

元の形すら解らない程に…。五体が確認出来ないくらいに…。生物であった事すら忘れてしまう程に、弄ばれた残骸達…

その弄ばれた残骸達が、望む事とは……。

「ッ……………！」

一瞬でも考えてしまったフェイトは、口元を両手で抑えながらその場に崩れた。

「大丈夫かテストロッサ、確りしろ。」

フェイトの後ろを歩いていたシグナムは、直ぐにフェイトに近寄り背を擦りながら落ち着かせる。

「ッ！…ごめんね、シグナム。」

「いや、謝るのは私のほうだ。もう少し調査が進んでから、伝えるべきだった…。」

「そんなことない、やっぱり謝るのは私だよ。覚悟が足りなかったんだ…。」

会話をしつつ、フェイトは立ち上がる。

「行こう、シグナム…。」

「ああ…そうだな…。」

そして二人は、歩きだした。
生命の残骸が、放置された通路を…。

それから暫く歩いて、通路の出入口に差し掛かったあたり。

何を思ったのか、フェイトはじっと、通路際の壁を見たまま動かなくなつた。

だがその表情は、フェイトのことを良く知らない人が見たら、硬直して仕まつ程に真剣そのものだった。

「……………」

シグナムも、フェイトと同じ方を向いた。

何のへんてつも無い、壁があるだけ…。反対側は、さっきまでの道のりにあつたのと同じ生体ポットがあるだけ…。

しかし、中のモノは回収されたらしく、空っぽだ。

そこまでシグナムが確認した所で、フェイトが急に動き出した。

「おっ、おい！テストロッサ！？」

シグナムの声に構わず、フェイトは壁に向かってずんずんと歩いて行く。

「……………。まっまでまで、どうした急に…！」

一瞬ポカンとしてしまったシグナムは、スグに立ち直りフェイトの後を追いかける。

シグナムがフェイトに追い付いたと同時に、二人は壁の目の前にたどり着いた。

「テストロッ…」シグナム、ちょっと離れてて…！」…？」

「…バルディツシュ!!」

そう言うや否や、フェイトはデバイスを起動させ…。

「ハーケン、セイバー!!」

目の前の壁に向かって、魔法を撃ち込んだ…。

シグナムはフェイトの突然の行動に、一瞬呆気にとられたが、フェイトのデバイス起動のすぐ後に自身もデバイスを起動させて、後ろで待機していた。

「…テストロッサ、説明はして貰えるのか、…っ!!」

フェイトがハーケンを解除すると同時、シグナムはフェイトに質問しようとした所で、言葉が詰まる。

「…隠し部屋…だね…。」

そう、フェイトがハーケンセイバーを撃ち込んだ壁は崩れ去り…。
変わりに無骨な機材がみっしりと敷き詰められた部屋が姿を表したのだ…。

「シグナム、調査隊に連絡して貰えないかな? 私は先に中を調べたいから…。」

そう言うとフェイトは、シグナムの返答も待たずに隠し部屋へと入って行った。

「待てテストロッサ、私も行く…。」

シグナムはフェイトを一人で行かせる訳にもいかず、フェイトの後を追いかける…。

隠し部屋の中はとゆうと、随分と狭かった。

いや、部屋としては大きな方ではある。がっ、研究室として、些か狭い気がする。

そんな不信感を抱きながらも、フェイトとシグナムは、部屋中を調べる。

シグナムは主に機材等を調べ、フェイトは書類棚に仕舞ってある研究ファイルに目を通す。

「テストロッサ、ここは…。」

「…わからない。でも、他の部屋にあった機材とは違って、かなり最近まで使っていたみたいだね…。」

「そうだな…。しかし、一体誰が？元々ここで研究をしていた研究者達が、それとも…。」

違う人物なのか…。

フェイトと会話を続けつつ、シグナムは機材の調査に戻る。

「んっ？コレは…？」

そこで、奇妙に光るランプがシグナムの目に写った。
そのランプは、まるで心臓の鼓動の様に点滅を繰り返していた。

シグナムはそのランプを不気味に思いながらも、ランプの周辺機器を調べる。

結果的に分かった事は二つ。

この機材が、何らかの生体ポットと繋がっていること…。
その生体ポットの中身が、今も生きていることだ…。

此处まで調べたシグナムは、今も書類棚の書類を、食い入る様に読み漁っているフェイトを呼ばうとした所で…。

カチッ…。

運悪く機材のスイッチの内の一つを押してしまった…。

「…しまった!？」

「どうしかしたのシグナム？」

流石に焦るシグナム。そこで一通りの書類を読み終わったのだろうか、フェイトが話しかけてきた。

「いやっ、すまんテストロッサ!機材のスイッチを、誤って押してしまった…。」

一瞬の沈黙の後…。

「ちよっ!それ本当でs」「ガコンッ!」「ッッッ!」

急に部屋が揺れたかと思うと、次には天井の一部が割れて、ナニかが降りてきた。

それは生体ポット。しかし、通路にあつた様な簡素ものではなく、かなり高性能である事が見て取れる。

「コレは…。」

二人はその生体ポットを凝視していた。

いや、生体ポットの中身をだ。

何故ならば…。

「…人間だね…。」

その生体ポットの中には、綺麗な白髪の少年が入っていた。

…つつく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7415p/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS《白髪獣眼の戦士》

2011年10月7日12時39分発行